

忍著雄雄莖三

地底魔獸之章

成人向け



忍者雄莖伝

地底魔獣之章

文章・Mr. WOOD
挿絵・O S a

壺

日差しが強い。雲一つない澄んだ青空が遙か遠くの山際まで隙間なく広がっている。立っているだけで汗が滲み出しそうな暖かさが風に吹かれている。

小高い丘陵の山際に沿って走る街道を、一台の駕籠が走っていた。運び手が手練れなのか揺れは少なく、かつ相当な速さで風を切っている。禪一丁の屈強な雄二人が前後から力強く肩で支柱を担ぎ、丸太のように鍛えられた太腿を大きく振り上げる。足袋で地面を踏み締め、全速力で街道を駆け抜ける。

結われた鬘と濃い腋毛を風にたなびかせ、流れる汗をそのままに同じ速さを維持する。汗に濡れた筋肉は日差しの下で艶やかな照りを浮か

べ、雄の持つ逞しさを自然と醸し出している。

「おい、後どの位で城下町に辿り着ける」

「へい、旦那！今日は風も無えし天気も良いから走り易いんすわ。だからよお、もう暫くで到着すると……」

「旦那！おやっさん！丘の下、右向こうを見て下せえ！あれが『蔭吹（いんすい）』の城下町でつせ！もう少し辛抱して下せえ！」

揺れる駕籠の中から御簾を軽く持ち上げ、乗っている客が覗くように顔だけを半分外に出す。背負った荷物がずれないよう上半身は最小限しか起こさないようにしている。

短髪で精悍な顔付きの男性が、その鋭い眼光と吊り上がった太い眉毛をそのままに、言われた通りに右前方へと視線を向ける。

流れ込んできた風が若干長めの無精髭を靡かせ、太い首の脇を通りつつ、重ねが緩んだ襟元に

入り込む。風通しの悪い駕籠の中の蒸し暑さが若干打ち消され、抜けるような涼しさに心が落ち着く。

視線の先には、立派な城郭と天守閣。そしてその足元に広がる町の光景があった。平地とは言えない複雑に入り組んだ凸凹した大地に沿って灌漑工事の済んだ河川が流れており、そこから引かれた水が多数の水田に注がれており、青々とした稲穂が波打っている。

街中にも所々凸凹した大地が点々と存在しており、今は亡き先人たちの街作りの苦労が垣間見える。

「……うむ、あれか。陽が昇り切る前には着きたい。急いでくれ。……『特別手当』を付けてやるんだ。まだ頑張ってくれよ」

「！う、うっす！勿論っすよ旦那！おら、見習い！さっさと向かうぞ！足をもっと前出しやが

れっ！」

「……っ！？うっす！旦那、多少揺れますんでしっかり吊紐掴んで下せえよ！」

どこか威圧的ながらも雄々しい雰囲気を出す客の雄の言葉に、二人の運び手の顔は一気に真っ赤に染まり汗も溢れ出す。

同時に、なぜか股間を守る禪が大きく隆起し始め、まるで角のように布地を突き上げてしまう。その隆起を走る太腿が左右から引っ切り無しに刺激するので、二人の艶めいた喘ぎ声が

徐々に口から漏れ始める。

鬚と同じ程に濃い髭を蓄えた老齡間近の雄と、どこか垢ぬけた表情をする若い雄。衰えない速さと二人の喘ぎ声を聞きながら、客の雄は悠然と己の袴の中に手を突っ込んだ。

そして、掴み出した肉棒に涎をたっぷり纏わせてから、染み込ませるように丁寧に塗りにたく

る。揺れに合わせて自然に手を上下に動かせば、雄の誰もが欲する快感が生まれる。

「……着いたら人目の無い所で降ろせ。『特別手当』の方も運賃と一緒に払ってやる」

蔭吹の都は河川が近いのもあり、陸路と水路双方において運搬業が盛んである。すぐ付近に小高く広大な丘陵地帯があり、一部に人の手が入り掛けている。そこから流れる川を運搬路にして上流からは良質な木材に石材、下流からは海産物が市場に集まる。

その上、近隣では温暖な気候と上質な土壌による水田や農業が盛んである。この恵まれた立地条件の中で城下町は徐々に広がりを見せ、今や城郭を囲むように大きな円を描くように開拓は進んで行った。

今では数万単位の町人が行き交う中枢町とし

て機能している。故に昼夜問わず賑やかに人々の声が響き、老若男女様々な人々が様々な事に精を出している。

そのように面積に余裕を持つて作られた城下町であるが、それ故に所々人通りの少ない場所も存在する。殆どは塵置き場や不良の溜まり場などにされているが、中には仕事の休憩に使われる場所もある。

「ジュブツジュブツジュブツジュブツジュブツ……んっんっんふっ……ジュルルルル。どうだ、感じてしまうだろう」

「はっ……ああああ……！か、感じちまうぜ！だ、旦那の舌捌き……最高だべ……っあくっ！わ、わいはもう出すぞお……うごおおっ！」

「ひんっひんっひんっひんっひんっひんっ……す、凄……いいいい……！お、おやつさ……おらも、

もう駄目だああああ……?!」

先程まで駕籠を担いでいた二人の運び手が、向かい合って仁王立ちをしたまま、滝のように涎を垂れ流していた。禪からはいずれも劣らぬ立派な黒魔羅が反り返って勃起して飛び出している。

亀頭同士を押し付け合った兜合わせの状態のまま、足元に座り込む客が二本同時に口で奉仕していた。

生々しく脈打つ太い肉の棒を時に交互に、同時に口に含んで涎塗れにしていた。先端を丸めて尖らせた舌先を蛇のように小刻みに動かし、蒸れて敏感になった亀頭の谷間を啜る様に重点的に攻める。

指で睾丸を鷲掴むようにして擦り合わせながら中指で尻の谷間を進み、固く締まった肛門の爪先で突く。涎で濡らした爪先が難なく内部に

侵入し前立腺を削ると、反動で大きく腰が持ち上がる。

暫く魔羅を啜え続けていると、頭上から二人分の運び手の切ない喘ぎ声が聞こえた。次の瞬間には二つの鈴口から、肉体労働者らしい厚く濃厚な種汁が勢い良く噴き出した。

喉仏を上下させながら、ゴキユゴキユ音を立てて残らず飲み干されると、二人は恍惚の表情を浮かべたままその場に尻餅を着いた。

代わりに雄が立ち上がり、顔面に飛び散った種汁を腕で拭い、舌で器用に舐め取る。その股間からは、運び手たち以上に長く太い魔羅が飛び出していた。青筋を立てた龍のように、堂々と勃起していた。

「もう終わりか。思った以上に精の無い奴らだ。……これは己れ個人からの礼だ。存分に受け取れ」



そう言うが早い、雄は己の魔羅を激しく扱き出すと鼻息を荒くして腰を前後に振り始める。透明な先走りが水音を立てて溢れ出し、濡れた指先の摩擦で白く泡立つ。

そして、一瞬全身を強張らせて腰を前に突き出すと、低く唸りながら射精した。天を仰いで歯を食い縛り、眼前の運び手たちの全身に浴びせるように大量の種汁を漏らし噴き上げ続ける。

目の前の光景に興奮し再度自慰行為を開始した運び手たちの虚ろで血走った視線が、雄の歪んだ快感を押し上げ、厳つい表情を若干緩ませる。

「んふっ……んふう……ふぐおお……おお!! おおおおお……はあ、はあ、はあ……。こ、これで『特別手当』は終わりだ。約束通り、己れが此処に来た事は誰にも話すな。……では、これにて御免」

二人の大柄な運び手の全身を種汁で白濁に汚し尽すと、雄は駕籠から笠を取り出し顔を隠すように被る。

そして、そのまま己の雄臭さと熱気で周囲を包み込ませた場を足早に後にした。

残されたのは一台の駕籠と、雄の苦みと臭いに酔いながら自慰行為にふける全裸の運び手たちだけであった。

「はっはっはっはっはっ……はぎよおお! はうらうらうんっ!? お、おやっさ……、あ、あの野郎一体何者……何でしようやねえ……?」

「お、おおおおお……逝く逝く逝く逝く逝くくううううう……!! し、知らねえよ。た、ただゼツテエ只者じゃねえぞ。あんの舌捌きに種汁の量……どっかの色事師じゃねえのか? ……あ、うああああ……!」

「そ、そつすか……あんっああんっ……手、止ま

んねえよおおお……種汁溢れんの止まんねえし
……魔羅全然萎えねえよおおお……!!」

式

脈打ち昂り続ける魔羅は、長く伸び切った重い鞆丸袋を高く持ち上げるように天を仰いで勃起し続ける。下半身の無骨で雄々しい筋肉を覆い尽くす縮れた体毛に、鞆丸の底に沈殿し発酵したような種汁が絡み付く。

己の溢れんばかりの肉欲を抑え様にも抑え切れず、隣で喘ぎ乱れる仕事仲間の魔羅を啞え合うつと、そのまま喉仏を大きく鳴らして体液塗れの頬を膨らませる。

呻く様に発情の嬌声を上げて舌先を乱暴に動かして亀頭を犯す。喉を焼く雄の熱気が魔羅を一層勃起させ、更なる交尾の激化を誘う。

顔を他人の種汁で汚す二人の足元には、欲望の塊とも言える種汁が、徐々に白濁の生臭い海として広がっていくのだった……。

「お待たせ致した。里より派遣された雄忍の『影丸』 任務の為参上致した」

影丸と名乗った先程の雄は、城下町の中でも特に大きな屋敷に通されていた。大名屋敷という呼び名が似合うような立派な門構えが見る者を圧倒させる。

屋敷の中でも特に広い大広間に案内されると、下座に敷かれた座布団で待つように使用人に促され、正座で座り込む。

座布団は対面するように二枚敷かれており、上座に敷かれた一枚は木製の立派な座椅子と共に準備されている。

どちらの座布団にも雄同士の濃厚な行為風景の春画が細かく刺繍されており、見てしまった

影丸の魔羅が禪の中で脈打つ。

「……………っ！むうう……………」

思わず目を見開いて生唾を飲み込んでしまうが、何とか最大勃起を我慢して待つと、襖を開けて熟年の大柄な雄が堂々とした足取りで入ってきた。

立派な鬚と広い肩幅、脂肪が乗った胸と腹を抱えながらゆつくりと影丸の前に置かれた座椅子に胡坐をかく。

太い眉と太い首、滲む脂汗は精力盛んな雄のそれを連想させる。後頭部で乱雑に束ねられた鬚が勃起した黒い魔羅に見えるのは、影丸自身の問題か相手の狙いなのか。

すると、影丸の前の前で着物の前を故意に肌蹴させる。どうやら、あながち勘違いではないようだ。

影丸が日差しで熱を帯びた笠を脱いで、その

凜々しく精悍な顔を晒す。頭を下げて短く挨拶をすると、熟年の雄は大きく笑いながら頭を上げるよう促す。

「はっはっはっはっは！そんな畏まらなくて良いぞ！……………ふむ、流石は里一押しの雄忍だな。礼儀も顔も、それに体も十分に仕込まれているようだな」

「そ、それは有難い御言葉。嬉しく存じ上げます」
「ん？何だ。そんな事を悠長に言う余裕はあるのか？……………既に勃っておるぞ。おお！そんなに染みを広げおって……………」

「!?ひあ!?も、申し訳……………」

「ふふふふ……………はっはっはっは!!冗談だ冗談!どうやら中身はまだまだ純朴なようだな。」

……………まあ、それ故に一層そそられるものがあるのだがな。弄ぶのならば、それ相応の反応が無ければ味気ないしな」



雄の冗談にまんまと騙され顔を赤面させながら立ち上がって股間を隠してしまう。その言葉を聞いて一見冷静に、その実脳内は羞恥と自己嫌悪、そして若干の興奮とで滅茶苦茶になる。

若干の不安を感じながらも、気を取り直して再び正座で座る。

「と、まだ儂の名を申して無かったな。儂の名は日下猪太郎（くさかいのたろう）。短い間であるが、宜しく頼むぞ」

日下は一見能天気な金持ち旦那、その筋の者が見れば雄臭さを全身から沸き出させる淫乱野郎に見える。

しかし、時折見せる鋭い視線や隙の無い佇まい、そして何事にも動じない肝っ玉の強さは常人とは一線を画している。

腰に吊るした刀からは決して手を離さず、すぐ立てるよう気付けば片足立ちの姿勢で座り直

している。……開いた股間は大きく盛り上がっているが。

見せ付けてくる胸板や腕は尋常ではならない程に硬く鍛えられており、数え切れない傷だらけの体は通り抜けた修羅場の多さを感じさせる。

影丸も日下という人物の人となりについては事前に里の者からの伝達で知ってはいたが、こうして直に対面すると所作の端端にその片鱗を垣間見る事ができる。

「……宜しく頼み申す、日下殿。して、今回の依頼は……」

『依頼』という言葉を聞くと、笑顔を浮かべていた日下の表情が曇る。先程とは異なる真剣な面持ちで影丸を見据える。

「うむ、実はこの屋敷の裏に先祖代々の蔵が建つておるのだが、最近夜な夜な蔵の中から怪しい物音が聞こえてくるのだ。その調査を依頼し

たいのだが」

「今一度確認させて頂くが、近所の悪戯小僧や盗人が侵入したのでは……」

「無い。窓には鉄格子が入っておるし、鍵は儂が管理しておる。あそこを屋敷の盛り場にしていたのもかなり前だし、第一今は盛り場を別に用意しておるしな。どうだ影丸殿？今回の調査が終わったら儂と一緒に……♡」

一層胸板を肌蹴させながら、袴を太腿までたくし上げる。当たり前の様に股から禪の盛り上がりをつまみ出しては、それを扱くような動作をする。

毛深い太腿が露わになり、籠った熱気が一気に解放される。足袋の中からは雄の色気が沸き立つように感じられる。

「う、うおっほん!!そ、そのような話はまた別の機会でご頼み申す。……すると、例の隠し通路

は……」

「うむ、使用人に奥を調べさせたら見つかったな。どうやら随分前の先祖が掘ったらしいのだが、中の構造まではさっぱりでな。それらしい文献も設計図も蔵には残っておらんし、空気を通す竹筒が奥まで繋がっている事しかわからんだ。……それにしても、どうせならあのような暗い密室で影丸殿の中に儂の種汁を……♡」

更に袴がたくし上げられ、禪が緩んだ股からは零れた辜丸と鬱蒼と濃く汚い陰毛が微かな臭気を放っている。禪を湿らす先走りは、長年の摩擦と腸液で黒く変色した魔羅皮を浮かび上げらせる。

「そ、それは任務が終わりましたら存分に……ではなく!!せ、拙者は兎に角、音の正体を探るために蔵へ向かいます!そそそそそれでは……失礼致すっ!!」